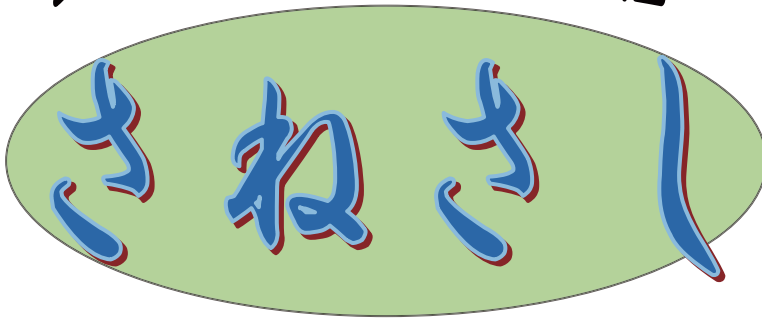




発行

令和 7 年 3 月 28 日

相模原市文化財調査・普及員
広報グループ文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク両手のひらと日本
建築伝統の組物を
イメージしたもの

～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

「長柄桜山古墳群」

「池子遺跡群資料館」を訪ねて

西部班では、毎年、遺跡や史跡を訪ねる「歴史探訪」を行っています。

今回は、逗子市と葉山町にまたがる「ながえさくらやまこふんぐん長柄桜山古墳群」と、逗子市のかつて旧日本海軍の弾薬庫のあった地域にある「いけこ池子遺跡群資料館」を訪ねました。

長柄桜山古墳群は、逗子市と葉山町が接する地域に大規模開発された葉桜団地西側の小高い丘の頂部（現在の第1号墳）で、平成11年3月、近隣にお住まいだった故東家洋之助さんが埴輪片を発見したことをきっかけにその存在が公に知られることとなったそうです。

その後、県内の考古学研究者がその西側約600メートルの丘陵頂部（現在の第2号墳）も同様の古墳であることを指摘し、第1号墳と同様の古墳であることが明らかになったようです。

第1号墳、第2号墳とも全長90メートル前後の神奈川県内では最大級の前方後円墳として、平成14年12月19日、「長柄桜山古墳群」として国の史跡指定を受けました。

史跡指定の理由は、「三浦半島西岸の付け根に位置する2基の前期大型前方後円墳からなる古墳群で、畿内地域と東日本を結ぶ太平洋側の交通の要衝にあり、古墳時代における関東と畿内を結ぶ交通や、南関東の地域の情勢を考える上で重要な遺跡である」ことです。

指定区域内は様々な樹木が残り、登ってゆくと整備された第1号墳に着き、その大きさに驚き、円筒埴輪が置かれた後円部墳頂からは眼下に江の島が見え、晴れた日には富士山も望めるという素晴らしいロケーションに、この古墳の造られた願いが分かった気がしました（右写真参照）。

第2号墳は鬱蒼とした木立の中に、さらなる調査や整備を待っているような感じを受け、第1号墳と第2号墳との距離から、まだ隠れている古墳があるような気がしながら、急な坂を下りました。

つづいて、池子遺跡群資料館に向かいました。この遺跡群は、池子川の谷に広く分布している遺跡で、資料館には県指定重要文化財241点を含む貴重な資料が保存され展示されています。その中で特に関心を持ったものは弥生時代の木製品でした。粘土質の土の中に埋もれていたため色も鮮やかで、2000年もの長いときを経たものとは思えませんでした。

(西部班 永山)

目	次
・「長柄桜山古墳群」・「池子遺跡群資料館」を訪ねて……………	P 1
・旧陸軍電信第一連隊 奠營訓辭碑について……………	P 2
・東原古墳と谷原古墳群……………	P 3
・上九沢の文化財を訪ねて……………	P 4



旧陸軍電信第一連隊 奠營訓辭碑について

てんえいくんじひ

○ 電信第一連隊の沿革

明治10年東京中野編成の軍用電信係（後に軍用電信隊）が発展し、昭和12年頃、訓練使用の演習場が狭隘となったため、陸軍通信学校と共に転営を検討、同時期移転の陸軍士官学校にならい、相模原に決定した。場所は小田急相模原駅北部の地域（現米軍相模住宅）で転営準備し、昭和13年7月川村赳大佐の連隊長着任に伴い、営庭に「奠營訓辭」碑を建立。その後、第二十五軍隷下、二十五軍通信隊を編成し太平洋戦争に従軍。一方残留将兵は補充隊、通称「東部八八部隊」を編成。終戦米軍進駐後、補充隊は千葉県に移駐し復員業務を担当。電信第一連隊跡地は東側を拡張、在日米軍相模住宅地区となり、碑は跡地に放置されていたが、電一戦友連絡会の市長への陳情で、昭和37年11月25日に現相模原市慰霊塔（相模原市南区東大沼1）の敷地内に移された。平成27年4月1日に相模原市登録有形文化財に登録され、連隊の歴史や移転の経緯、往事の世相などを今に伝える。



奠營訓辭碑

○ 奠營訓辭碑 碑文

維時昭和十四年一月二十二日我電信第一聯隊八相模河畔相武ノ野ニ轉營ノ事ヲ行フ惟フニ聖戰茲二一年有半東亜新秩序建設其ノ緒ニ就クノ秋眞戰場ヲ髣髴セシムル練武恰適ノ地タル相武原頭ニ定屯スルハ寔ニ是天ノ時ト地ノ利トヲ併セ得タリ謂ヒツヘク之力運營ノ要諦ハ一二係ツテ人ノ和二存ス故ニ曰ク「天ノ時ハ地ノ利ニ如カス地ノ利ハ人ノ和二如カス」ト即チ我聯隊ヲシテ皇軍ノ精華トシテ附託ノ重キニ對ヘ奉ラシムル所以ノモノハ唯々我等將兵協心戮力奉公ノ誠ヲ擢ンツルニ在ルノミ回顧スレバ營屯ノ地ヲ中野ニ奠メラレテヨリ春秋ヲ閱スルコト三十有八年此間或イハ征野ニ骸ヲ暴シ重命輕生其威烈ヲ天下後世に讃ヘシメ或イハ技ヲ寒熱ニ練リ勵精躬行其儀表ヲ衆庶ニ示シ以テ我力聯隊今日ノ榮譽ヲ擔ヒタルモノ蓋シ偶然ニ非サルナリ諸子今赫々タル相武原頭聯隊歴史ノ第一齣ヲ畫セントスルニ當リ忠誠勇武ナル先輩ノ光輝アル功勲ヲ景仰シ愈々節操ヲ鞏クシ烈々ノ氣魄ニ燃ユル所 聖諭ヲ奉體シ各々其ノ本分ヲ恪守シ皇威ヲ中外ニ顯揚シ滋々聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ努メヨ

昭和十四年二月一日 電信第一聯隊長 川村 赳

維時（これとき） 茲（ここ） 秋（とき） 髣髴（ほうふつ）
練武恰適（れんぶごうてき） 寔（まこと） 戮力（りくりよく）
奠（さだ） 閱（けみ） 勵精躬行（れいせいきゆうこう）
蓋（けだ） 赫々（かくかく） 齣（しやく） 愈々（いよいよ）
鞏（かた） 奉體（ほうたい） 顯揚（けんよう） 滋々（ますます） 副（そ）

（東部班 安本）

東原古墳と谷原古墳群

相模原は、弥生時代から古墳時代後期（6世紀）まで居住基盤がなく、木の伐採・カヤ場・狩猟採集などの場所となっていたと考えられています。

7世紀になると、相模原市域に集落が形成され、はじめて農業や手工業開発が行われるようになり、相模川上流の支流域の光明学園相模原高校の南方に東原遺跡（7世紀の竪穴住居跡5軒）・当麻芹沢遺跡（7世紀の竪穴住居跡2軒）、八瀬川の左岸の上溝バイパス上に当麻遺跡第2地点（7世紀の竪穴住居跡7軒）、相模川と八瀬川に挟まれた段丘面で、田名向原遺跡の北側に田名塩田遺跡群（7世紀の竪穴住居跡36軒）が見つかっています。

JR相模線「原当麻駅」の南西400m、東原公園内に東原古墳があります。谷原古墳群は、相模原愛川ICの北にある広域水道企業団相模原ポンプ場から田名向原遺跡公園までの間にあった14基の古墳です。畑作や土地区画整理事業により、ほとんどが消滅しています。現在確認できるのは、ポンプ場の1号墳・3号墳と金山神社境内の4号墳、田名向原遺跡公園内にある13号墳・14号墳です。

石室内までの発掘調査された古墳は、東原古墳・ポンプ場の1号墳～3号墳・旧石器ハテナ館の横にある鉄塔の下にあった11号墳・旧石器ハテナ館の北隣にあった12号墳です。そのうち市指定史跡となったのは、東原古墳と谷原1号墳です。

古墳の立地からみると、東原古墳が田名原段丘面にあり一番高く、一段低い陽原段丘面の高位面に位置するJA相模原市緑化センターにあったと推定される古墳1基が次に高く、陽原段丘面の低位面にある谷原古墳群14基が一番低い位置関係にあります。JA相模原市緑化センター推定古墳の被葬者は谷原古墳群を直接統括し、東原古墳の被葬者

は地域を代表する地位にあった可能性があります。

東原古墳および谷原古墳群の古墳は、すべて円墳で、構造や規模の点で均質です。外径約20mの周溝を掘り、周溝の南側から石室に向かって長方形の前庭部が掘られ、それに接続して石室を納める大きな長方形の土坑を掘り、その土坑中に河原石を積み上げて、幅狭い長方形の横穴式の石室を築いています。遺骨片が2体以上埋葬されていたことから家族墓だと思われます。盗掘を受けて石室内は荒らされていました。

東原古墳では出土した副葬品のうち、武器は刀装具3点、鏃18点、馬具は1対の木製壺鍔付属金具などがみつかっています。装身具は、耳環（ピアス）1対とネックレス材の切子玉8点、メノウ製棗玉1点、ガラス製小玉408点と鉄製帯金具2点、工具の刀子2点がありました。これらの一部は市立博物館で展示されています。

谷原古墳の1号墳、2号墳、11号墳、12号墳では、武具では直刀・鏃、装身具では耳環（ピアス）・ネックレス材の切子玉など、工具では刀子・砥石などが出土しています。12号墳の副葬品の一部は旧石器ハテナ館で展示されています。

田名向原遺跡公園内には12号墳を復元した円墳が移築しており、ボランティア団体である田名向原遺跡案内・普及事業実行委員会がガイドを行っています。毎月第1～4日曜日の10時から16時の間でしたら、墳丘の石室の中に入って見学することができます。（南部班 榎林）



東原古墳・谷原古墳群及び周辺集落遺跡位置図

上九沢の文化財を訪ねて

上九沢村は慶長元年（1596、豊臣秀吉の時代）に検地が実施され、このころに大島村から分村した独立行政村落と考えられています（村高 33 石）。

北部班・津久井班・東南班の合同研修として上九沢の文化財を訪ねてみました。（北部班 原）

① 旧笹野家住宅

笹野家は家系図によれば元禄元年（1688、江戸時代前期）に見え、江戸時代には名主を務め明治初期にはこの地区の村政・教育にかかわってきた名望家でした。旧笹野家住宅は江戸時代の主屋や長屋門を備え、郷土の生活文化を知るうえで貴重な古民家です。

・主屋（国登録有形文化財）

明治 2 年に前家屋が焼失したため長竹の古民家を移築しました。建築年代は不明ですが江戸時代中頃の建築と考えられ、約 300 年の歴史があります。平成 27 年 3 月まで笹野ハルさんが住んでいて、その後相模原市に寄贈されました。桁行約 17m・梁行約 10mの規模を持つ大型の六間取り民家です。麦藁葺きの屋根を瓦葺きに変えています。建具・調度品を含めて旧状をよくとどめています。

・長屋門（国登録有形文化財）

江戸時代末期から明治初期の建築と考えられており、約 150 年以上の歴史があります。桁行 11.7m・梁行 3.6m の規模を持つ中型の長屋門です。屋根は昭和 18 年ごろまで麦藁葺きで、その後トタン葺きとしました。扉口両脇の柱に冠木をのせ、これに桁行 5 本の天秤梁をかけ、その上に天井を張っています。外壁は隅柱を露出させていますが正面側の他の柱は塗籠です。



② 梅宗寺

慶長 2 年（1597、豊臣秀吉の時代）緑区根小屋の功雲寺第 10 世柳山和尚により、梅宗庵として開山されました。その後享保 8 年（1723、徳川吉宗の時代）に梅宗寺と寺号を改め 400 年余り続いています。ご本尊はお釈迦様で境内には干支の守り本尊である八尊仏があります。

・百観音（市登録有形民俗文化財）

この百観音は西国 1 番から 33 番、坂東 1 番から 33 番、秩父 1 番から 34 番の札所番号を刻印した台座にのる 100 基の石造り観音像で、現在まで 1 基も欠くことなく維持されています。山状角柱型の石塔に観音像を浮き彫りするもので、台座を含めた高さは各 1 番が 131cm、2 番以降が 66.5cm です（天明 5 年・1785 年製）。造立目的は先祖供養ですが西国 20 番の千手観音は「白子観音」と呼ばれ安産の守り本尊として信仰を集めています。（参拝の際は事前に寺にお問い合わせください）

・南山禅師顕彰碑

南山禅師は、上九沢名主笹野政右衛門の次男で宝暦 6 年（1756、江戸時代中期）の生まれです。9 歳の時菩提寺の大島長徳寺で出家し、11 歳の時江戸高輪の東禅寺で修行しました。13 歳の時仙台藩主伊達重村が父宗村の 13 回忌法要のため東禅寺に詣でた際、南山は茶を給仕しましたが誤って茶碗を落とし、重村公の袴の裾に茶をかけてしまいました。重村公は怒って刀に手をかけましたが、落ち着いて過ちを謝す南山の態度に感じ入り、これを許して学禄 2 人扶持を給し将来を約束しました。寛政 5 年（1793）重村の召しに応じ、伊達家 3 代の廟所である仙台瑞鳳寺の第 14 代住職となり、その後伊達家の顧問格としても活躍しました。



上段左 旧笹野家主屋
右 同 長屋門
中段左 梅宗寺
右 百観音
下段 南山禅師顕彰碑